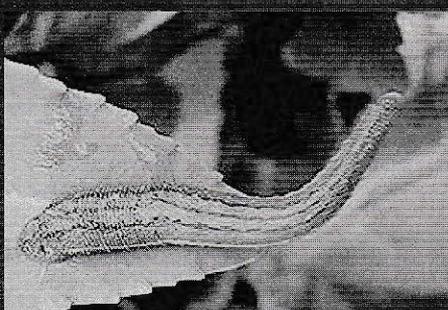


# ヤマビル 被害増加



背面の黒い線が特徴のヤマビル  
「環境文化創造研究所」提供

## シカやイノシシに付着…生息域拡大

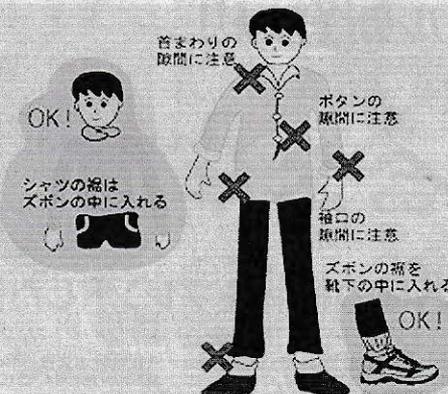
紅葉狩りやキノコ狩りが人気の秋。だが、登山やキャンプの大敵ヤマビルの生息域が拡大しており、注意が必要だ。知らないうちにまとわりつき血を吸われてしまう厄介者で、存在は昔から知られていた。なぜ近年になって被害が増えたのか。

(西田直晃)

「二十数年で、じわりじわりと増えてきた印象。被害の声も寄せられ、安全面で何かしらの対策が必要になった」  
栃木県森林整備課の担当者はこう話す。四月、農林業従事者や登山者に向けた「ヤマビル対策マニュアル」を発行。生息調査を始めた二〇〇八年に確認されたのは日光市、佐野市など県北西部の四市町だったが、二〇年の調査では周辺の足利市、那須塩原市などを含む八市町に拡大したとして警戒を促した。

神奈川県が〇九年に公開したマニュアルでも、丹沢山地の広範囲に生息し、年を追うごとに分布は広がっている様子が分かる。群馬県では〇九年から一六年までに生息面積が一・三倍になった。

どんな生き物か。釣り餌で知られるゴカイ類やミミズ類と同じ環形動物で、体長一〜五センチ。



環境文化創造研究所が運営するホームページ「ヤマビル研究会」の一部

動物の血液が栄養源で、吸血すると、一カ月後に落ち葉や石の隙間に卵を産み付ける。四月〜十一月に主に活動し、気温二〇度以上、湿度70%程度の気候で地表に多く現れる。靴で踏んでも死なないという。

もともと山奥に原生していたが、二ホンシカやイノシシに吸血する際に付着し、彼らに依存する形で生息域を拡大させてきた。危険生物の実態に詳しい自然教育指導者の西海太介氏(三〇)は、「致死や感染の危険性はないが、ヒルジンという物質の影響で血が止まらなくなる。靴下が赤く染まるケースもあり、初めて遭遇した人はかなり驚くだろう」と語る。各自治体はホームページなどで、忌避剤の利用や遭遇時の注意点、治療法などを紹介している。

ヤマビルを研究する環境文化創造研究所(千葉県習志野市)によれば、生息域拡大の最大要因は、長期にわたる日本林業の低迷だ。

林野庁の統計によると、一九六四年に木材の輸入が全面的に自由化されると、九割近かった日本の木材自給率は大幅に低下し、二〇〇〇年代に一時は二割を下回った。さらに、国内の森林面積は過去五十年間でほぼ変わらないが、木の量を示す「森林蓄積」は約一・七倍に膨らんだ。伐採すべき木が放置され、各地で森林の荒廃を招いた。

同研究所の谷重和主席研究員は「日本の山林のほとんどは、日光が当たらずに真昼でも暗くじめじめしている。下草をはじめ、花や実が育たない。エサがない二ホンシカやイノシシは里山や人家周辺に下りてくるようになり、それらに付着するヤマビルの生息域も同じように広がってきた」と解説する。

温暖化による降雪量の減少や山間地の耕作放棄地の増加、猟師の不在なども影響しているという。谷氏はこう指摘する。

「森林の荒廃に手を打つといっても、昔のように戻すのは非常に難しい。人間の社会・経済活動が自然生態系に大きな変化をもたらした結果だ」

## 林業低迷・森林荒廃 「人間の活動が生態系に影響」

か度える  
さん。「飯塚事件一つで、死刑はせず、ピラは黙って配るの

る。